



< 第113回 ほほえみの会 >

のぞみの会(がんの子供を守る会)静岡支部総会と合同で開催されました。のぞみの会のソーシャルワーカー稲塚さんも参加し、東京のペアレンツハウスが亀戸に加えて浅草橋にも新設されたことなどが報告されました。ペアレンツハウスは東京での治療や入院時に宿泊できる施設で患児は無料、家族は1000円で利用できます。また、晩期障害についての講演もありました。

< 講演 >

「小児がんの晩期障害」 日本医科大学 小児科助教授 前田美穂先生

- ・ 小児がんは治る病気になってきたが、治った後も苦労されている方が多いことがわかってきた。小児がんの発症頻度は年間1万人に1人とされている。70%が治ると若年成人の930人に1人が既往を持つことになり、将来的には250人に1人となるとされている。
- ・ 治療と晩期障害
  1. 薬剤 - 心毒性、二次がん、神経障害、難聴など
  2. 放射線 - 頭部・低身長、二次がん、歯、難聴など  
局所・骨異常、不妊など
  3. 手術 - 骨、筋肉など
  4. 輸血 - ウイルス感染
  5. 造血幹細胞移植 - GVHD、不妊、脱毛など
  6. その他 - 心理的問題、就職、結婚、保険など
- ・ 低身長  
急性リンパ性白血病の場合、5-6歳以下で放射線治療を受けた人に影響が出やすい。また女子の方が影響が出やすいという調査結果がある。成長ホルモンで回復している。
- ・ 歯  
歯牙の異常は放射線の影響が強い。大人になって歯周病など苦労することがあるので人一倍の歯のケアが必要。

- ・ 神経障害 - 中枢神経障害  
知的障害、白質脳症(てんかんなど) もやもや病など頭蓋放射線照射やある薬の大量療法などで起こることがある
- ・ 内分泌の障害  
低身長、性腺機能障害、甲状腺機能障害(機能低下、がん)
- ・ 心機能障害  
アントラサイクリンという薬で慢性の心毒症が起きる。蓄積性があり心不全にも。使わざるを得ないケースもあり使い方には注意をしている。
- ・ 肝障害  
輸血後の肝炎(C型 92年までは検査なし) インターフェロンで30%治癒、自然消滅する場合もある。ウイルスが残る場合20~30年で肝硬変、肝がんになるケースもある。
- ・ 二次がん  
健全な人に比べ発症頻度約20倍、治療終了から20年後の発症確率は3-12%、二次がんでは白血病を発症することが比較的多い。
- ・ 対策  
放射線照射の減少、中止、アントラサイクリン系抗がん剤の減少、血液ウイルスチェック、のほかに長期経過観察外来設置、社会啓蒙など。長期フォローアップの外来はすでに順天堂大学にはある。こども病院でもシステム化を図りつつある、とのこと。

\*\*\*\*\*

私の高校2年生の娘が「骨肉腫」の診断を受け、またこども病院へ入院することになりました。神経芽細胞腫の治療の後、4年後に甲状腺がんの手術を受け、さらに9年後の発症です。これも晩期障害の二次がんではないかと思われませんが、ここ数十年の間に医療環境は大きく変わっており、本人も明るく治療に臨んでいます。また病棟でお世話になります。

次回 は 12月 12日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560

E-mailアドレス k\_likeda@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.geocities.jp/hohoeminokai/>